

であい



公益社団法人
北海道国際交流・協力総合センター
HIECC/ハイエック
(旧 社団法人北方圏センター)
Hokkaido International Exchange and Cooperation Center

平成24年度多文化共生推進事業 第1回「多言語対応救急救命表示板」 シミュレーション研修を実施 @北海道消防学校(江別市)



平成23年12月現在、留学生、技能実習生を含む外国人登録者数は北海道全体で22,075人で、外国人観光客来道人数を合わせると年間で合計約73万人にのぼる外国人が北海道に滞在することになり日常的な様々な対応が必要とされている。特に、急病や怪我を負った外国人を病院へ搬送する時には言葉を使わずに速やかに状況を把握しなければならない。救急救命表示板は、平成20年度に言葉を使わないコミュニケーションツールとして全国初の試みとして当センターが製作し、北海道内68の消防本部に配付した。

その後、現場に最初に駆けつける救急救命士と急病やケガを負った外国人とのコミュニケーションを円滑にするために、北海道消防学

校において、これから救急隊員となる入校生とのシミュレーション研修を実施している。今回も5人の留学生等の参加を得て、「高所からの落下による頭痛」、「感電による火傷」、「呼吸困難」、「交通事故による胸痛、腹痛」等具体的な状況を設定しての症状判定、症状把握後の処置カードによる処置のシミュレーションなどを行った。

研修終了後には、留学生等からはコミュニケーションの取り方など救急隊員へのアドバイスを、また救急隊員からの質問等意見交換を行った。



処置カードを使っているシミュレーション

フィリピン・スタディツアー参加の高校生、 車いすの整備作業に参加 7月14日(土)、28日(土)、31日(火)

HIECCの事業のうち、将来の北海道を担う国際感覚を持った人材の育成を目指す「高校生・アジアの架け橋養成事業」は開発途上国を訪問し、格差や環境問題などに向き合う研修を行う。今年は8月に8名の高校生がフィリピンを訪問し、様々な経験を積んできた。(この研修の様子は小紙「であい」の後の号で紹介する)訪問時、参加者は認定NPO法人「飛んでけ!車いす」の会の協力のもと、車いす2台を手荷物として持参し、フィリピン側に手渡してきた。

出発前、高校生たちはメンテナンス場である(株)札幌通運倉庫(札幌市中央区北10西17)で長年車いすの清掃・整備を続けているボランティア達の指導を受けながら、自分たちが持参する車いすの整備作業を行った。車いすの修理は初めてという高校生の一人は、「車いすの仕組みがわかって面白かった」と暑い中で作業をしていた。

車いすは以前の鋼鉄製パイプから最近ではアルミパイプが主流になって1台12kg程度まで軽くなっているが、それでも8名で2台(約28kg)を持参するには各自の荷物を極力軽くしなければならず、出発前の荷物作りには苦心したようだ。



ボランティアさんの指導で整備に励む高校生

認定NPO法人
「飛んでけ!車いす」の会
(Go!Fly!Wheelchairs)

〒064-0808 札幌市中央区南8条西2丁目 市民活動プラザ星園 407号室
TEL/FAX 011-206-7775
日本で使われなくなって提供された車いすを整備ボランティアの手によって清掃・整備し、海外へ行く旅行者に託し、発展途上国の障がい者・児に贈る。これまでに飛んだ車いすは75カ国、2,139台。

カルチャーナイト 2012開催

7月13日(金)
午後6時半から午後9時

いつもは昼間しか開いていない文化施設、公共施設などを夜間に見学・体験できるイベントとして今年で10回目を迎えたカルチャーナイト。今年は札幌市内だけでも100カ所を超える公共施設が開放された。

HIECCは今年もこのイベントに参加して、南米からの北海道海外技術研修員や移住者子弟留学生、札幌や小樽の大学の留学生、JICA日系研修員など12名の外国人の参加協力を得て「世界の遊び・クイズ」、「ワールドカフェ」、「世界の民族衣装を着てみよう」と世界を知り、外国人とコミュニケーションを図るプログラムを組んだ。

「遊びとクイズ」の会場では、ブラジルとパラグアイの留学生が子どもを対象にした遊びや踊りを紹介した。また、クイズは大人も参加できる内容で幅広い年代の人たちが楽しんでいた。「カフェ」では、補助役として北海学園大学人文学部の学生10名が外国人参加者と市民が交流する時に英語で通訳を担当した。

家族連れ、学校帰りの高校生、若者たちなど205名が道庁別館12階のHIECCまで上がってきてくれ、夏の一夜、国際的な雰囲気を楽しんでいた。



「世界の遊び」コーナー

▶伝統のポルダンスを披露するパラグアイの研修員



鈴木直道夕張市長(中央)と留学生たち

★夕張市の現状についてレクチャーを受ける

お祭りの前には夕張市職員から、夕張市が財政破綻となった経緯についてのレクチャーを受け、「夕張に若者が戻ってくるにはどうしたら良いか」というテーマでディスカッションを行った。留学生からは「夕張のブランドをもっとアピールしたほうが良い」、「大学との連携が必要」など数多くの意見が出され、有意義な意見交換の場となった。



「石炭博物館」での体験。実際の坑道と石炭層をキャップランプの明かりで見学する必見(?)の「まっくら探検」

★炭鉱の歴史を学ぶ

2日目は石炭博物館(同市高松7-2)を見学し、長年夕張を支えてきた炭鉱の歴史について学んだ。特に「まっくら探検」ではヘルメットを被りエレベーターと階段で地下に降りた。これは炭鉱時代におこなっていた1000mの縦坑を降りる訓練の模擬体験で、石炭を掘り出していた当時の炭鉱内の様子を実感した。期間中は天気にも恵まれ、お昼には野外でのジンギスカンパーティーなども行い、市民と一緒に食事を楽しんだ。

留学生たちは2日間のプログラムへの参加を通じて、夕張市民の温かさや力強さに触れ、財政破綻で大変な状況の中でも元気を取り戻しつつある夕張の姿を感じることができた。

★北海道のファンになって欲しい

参加した留学生等からは、「一回破綻した夕張市が立ち直ってにぎやかに、お祭りを行っているのを見て本当に感動しました」、「市民にはまだまだ力があることがわかりました」、「皆で食べたジンギスカンと夕張ラーメンはとてもおいしかった。一生、思い出になると思います」などたくさんの喜びの感想を伝えてくれた。

北海道は豊かな自然や気候風土、おいしい食べ物など留学生にとって過ごしやすい地域といえる。こうした環境に加えて、北海道の人々の心の温かさに触れることで、多くの留学生が北海道ファンとなり、出身国・地域との交流の橋渡しとなってもらえることが期待される。北海道国際交流・協力総合センター(HIECC)でも留学生と地域の人々とのふれあいの場づくりをこれからもしっかりとサポートしていきたい。

(国際協力部 金子)



お世話になった夕張の皆さん

特集

「留学生ふれあい交流」



「夕張」

夕張夏まつり参加とバスツアーを開催



ブルキナファソにおける
野球普及活動

出合 祐太 さん
ふらのまちづくり会社勤務

「必要なのは…野球ではない」

私は2008年3月から2年間、西アフリカのブルキナファンで野球の普及活動を行いました。「野球の魅力を伝えたい」という想いで協力隊になり、「ブルキナ野球の歴史をつくるぞー!」と意気込んで赴任しましたが、現実には厳しいものでした。最貧国といわれる同国ではスポーツが出来るのは一部の恵まれた人たちだけ。大人は口々に「スポーツでご飯が食べられるのですか?」、「僕たちは生きることで精一杯なのです…」この国に必要なのは野球ではない。私はここにいるべきではないとひどく落ち込み、「帰国したい」と思うようになっていました。

「野球をする理由」

赴任して半年経ったある日、隣に住んでいた11歳の少年が自宅を訪ねてきました。「ねえ、白人。何かスポーツやっているでしょ?オレにもやらせてよ」その子は目をキラキラさせて私とキャッチボールをしました。彼はそれから毎日僕とキャッチボールをしました。そのうち6人、9人、15人と仲間が増えました。彼らは本当に野球が好きになり、生きがいとなり「プロ野球選手になりたい!」という夢も描くようになりました。その時には皆、野球をすることの見返りなんて考えていませんでした。

「野球が変えてくれた」

その後、「もっと良い野球をするには…」と自分たちで考え、行動するようになっていきました。彼らの「人間力」は野球によって育まれていきました。

私が帰国した今も、彼らは日本でプレーすることを目標としています。私は彼らの夢を全力で支援し、同国で誰もが野球というスポーツができる社会を目指したいと心に誓いました。まずは来年、日本の独立リーグのトライアウトを受験したいと考えています。ご賛同いただける方がいらっしゃいましたら、ぜひご連絡ください。

どうぞよろしくお願いいたします。西アフリカに野球を!!

青年海外協力隊 平成19年度4次隊
職種:野球
派遣国:ブルキナファン

ブルキナファン野球を応援する会

(代表 出合 祐太)
〒076-0006 富良野市字西扇山2
Tel 0167-23-4505 メール yutadeai@gmail.com
http://burkinabaseball.com/index.html



JICA研修員 下川町の森林の取り組みに学ぶ

独立行政法人国際協力機構(JICA)の地域別研修「アジア・中南米地域C&I森林認証コース」に参加したアルゼンチン、ミャンマー、中国、メキシコ、タイ、ベトナムの6カ国8名の研修員が6月21日に北海道北部、上川郡下川町の下川町森林組合を訪問し、下川町の「FSC® 森林認証」に関する取り組みを視察した。研修員は林業・林産業関係の研究者、調査官、大学講師等で、自国の持続的な森林経営強化のために、日本の森林経営に関する基準指数(C&I)や認証制度に関して知識を高めるため5月28日に来日。前半は林野庁、つくば森林総合研究所等で研修、後半は下川町や住友林業フォレストサービス株式会社(紋別市)等を視察した。

下川町は北海道で初めて「FSC®(Forest Stewardship Council 森林管理協議会)森林認証」※①を取得し、全町有林が認証を受けている。また、製材工場から出る木屑を燃料にして、五味温泉等に木質バイオマスボイラーを導入し、CO₂と経費の削減を図るため、カーボン・オフセット※②に取り組んでいる。その先駆的な施策を評価され環境省から「環境モデル都市」として認定されている。



21日午前、下川町林業組合職員から「FSC® 森林認証」を受けるまでの過程などの講義を受け、午後は町内の溪和森林公園、木炭小径木関連工場、集成材工場を見学した。中でも木炭製造で発生した煙を冷やして出来る木酢液を材木に浸透させて燻することで防腐効果のある燻煙材をつくる過程や、間伐時に切り出されたトドマツの枝葉を蒸留して精油(エッセンシャルオイル)を抽出するなど、「森の恵みを余すことなく」活用する取り組みには研修員から大きな関心が寄せられていた。メキシコからの研修員マーティン・マルティネスさんは「下川町の森林に対する意識の高さには驚いた。木を木材としてだけではなく端材をバイオマスボイラーに使用したり、煙をも木酢液として木材の付加価値を高めるために活用していることは驚嘆に値する」と感心していた。

(調査研究部 森内)

- ※① 世界の森林と、木材の流通や加工のプロセスを認証する国際機関(NGO)(1993年にカナダで創設)で、森林の環境保全に配慮した木材に認証が与えられる
- ※② 日常生活による二酸化炭素の排出を相殺するために植林や自然エネルギーを利用しようというもの



クマの生活を考えるコーナー

アースデー @

札幌
円山動物園

学生運動や市民運動が盛んだった1970年代、アメリカで始まったアースデーは世界に広まった地球フェスティバルである。運動のスタートが宣言された4月22日の“地球の日”を中心に各地で地球環境をテーマにイベントが行われる。

北極圏のホッキョクグマ、密林のアムールトラ、チンパンジーなど生息地で環境問題にさらされ絶滅の危機に瀕している動物たちもいる円山動物園では、6月2日(土)、3日(日)の両日、自然環境の保全活動をしている団体・グループが、動物たちから人間へのメッセージを感じ取ろうと、様々な取り組みを行った。

野山で拾ってきた木

の実や木の枝を使っのクラフト作りやクイズを通して動物との共生の在り方を考えるなど親子で参加するイベント、また、オオカミ、は虫類、両生類の生態を知るコーナー等で自然や動物たちの暮らしを体験した。園内各所にフェアトレードの食品やスローフードのお菓子などを提供するカフェも出店して親子連れや若者で賑わっていた。ヒグマ館の前では、NPO法人EnVision環境保全事務所とJBN日本クマネットワークのメンバーが採取して乾燥させたクマの糞や食べ物などを展示してクマがどのような生活をしているかを考えるコーナーを開設し、おっかなびっくり半分興味津々の子供たちがのぞき込んでいた。

さっぽろ
留学生日記



ショウハン
陳 彼涵さん
(中華民国)
(北海学園大学経営学部3年)

地に足がついている
しっかり者

日本語を勉強したかった。

「80歳になる祖母は日本語が話せます」と台湾と日本の長い歴史の一端をうかがわせた。陳さんはもともと外国語が好きだったそうだが、19歳の頃、日本語を勉強したいと思ったそうでした。それから1年半ほど勉強して北海学園大学に留学してきた。

アルバイトができたなら、生活費は自分で

3年になって大学の講義は1日4コマで計6時間になってあまり時間に余裕はない。「今はアルバイトはしていません。両親が仕送りしてくれていますが、生活費は自分で働いて稼ぎたい」と言う。台湾のご両親は「経験のためならアルバイトをしても良い」と理解を示している。そのうちに何か仕事を探したい様子。

台湾と日本の間で貿易の仕事

「将来は日本との貿易の仕事をしたいです」という陳さんだが、子供の頃、仕事で忙しかったお父さんを見て会社を作りたいと思ったそうで、自分も会社を持って仕事をしたいと希望している。

北海道内を少し旅行したが知床など道東はまだ行ってない。「台湾はどこに行っても同じですが、北海道は各地に特色があって良いと思います」と言っていたが、台湾も様々あるのではないかなあ、と。

スープカレー大好き。分煙が不十分では

札幌名物のひとつ、スープカレーはあちこち食べ歩きをしたらしく、とっておきの1店を教えてもらった。食べ物は美味しいが、公共の場での分煙がしっかり出来て無いのは良くない、と厳しい指摘。わかります、せっかくの美味しいお店でも煙のせいで早々に出てくることもある。

